



こぼ ひと
花零す女

すみくらまりこ

片山廣子礼賛詩集
る詩

「翡翠」に寄せ

薔薇のなみだ

-くれなゐの

うばらの花に白う咲けど

のたまはすなりせまきみこころ- 片山 廣子

紅い花が泣けば

白い花も泣く

嬉しくも

哀しくも

なみだは連鎖する

別れ路

-いづくにか別れむ路にいたるまで

共に行かむと思ひ定めぬ- 片山 廣子

言葉に力

ひとに愛

唇の封印

破りし詩人

国護星（まもりぼし）になる

筆走り

-金のペン

うすあゐ色の墨のせて

心にもなくはしりすぎけり- 片山 廣子

一気に認め
読み返さず
外套の懐に
局に走った
あの雨の夜

濁り川

-すみとほる

光の底にやすらへる

枯木を見つつ心静けし-片山 廣子

濁り川が

運ぶは山土

氾濫のたび

民苦しみ

地肥ゆる

甘納豆

-わびしうも

甘納豆をつまみつつ

猫に物いふ夜の長きかな- 片山 廣子

干し豆を

水に戻して

糖で煮る

吾が舌上に

花々よ咲け

をどり

-青白き

月のひかりに身を投げて

舞はばや夜の落葉のをどり- 片山 廣子

化粧して

地上までの

宙の舞

思いの丈

云えばいい

空似

一言に

黒きひとみもをどりつる

春かへり来よ我が老いぬ間にー 片山 廣子

言葉面立ち

歩き方似た

若人が立つ

虹の橋を渡り

辿り来たあなた

震はせる

一月の夜や

何とはなしに眺むれば

わがたましひの羽の音するー 片山 廣子

一灯あれば

真闇も歩ける

一言あれば

希み生まれる

こころ震はせよ

染める

-わがむねに

みなぎる力このままに

注ぎいるべきうつろのあれば- 片山 廣子

ひたひたと

染めゆくは

ただ藍の色

淡さ重ねて

深めるのみ

その日

-さまさまの

よしなしごとを積上げし

生命くづれむ日のはかなさよ- 片山廣子

音信なくば

誰に様子を

訊けばよい

その日の事

打合せおく

密封

-我が恋よ

珠の小箱のふたしめて

後の世遠く持ちてゆかばや- 片山 廣子

確たる愛

あればこそ

螺鈿の箱の

蓋を閉め

蠟を垂らす

桂信子礼賛詩集 俳句に寄せる詩

恐れ

-いくたびも震ふ大地や寒昴-桂信子

海の底に

亀裂が走る

地の民に

恐れが走る

平らか成れ

花の為

-白菊とわれ月光の底に冴ゆ- 桂信子

昨日でなく
明日でなく
今日の太陽は
今日の花の為
輝いている

橋姫

-さしかかるひとつの橋の秋の暮れ- 桂信子

黒い河に
橋ひとつ
人ふたり
愛を差配す
橋の女神

鳴神

-つよき火を焚きて炎暑の道なほす- 桂信子

油照りに
乾く草木
火を放つ
一筋の
鳴神

蠢（うごめ）く

-ひたすらに赤し颱風前の薔薇- 桂信子

みどり食む

繭太り

蠢く

いのち

透きとほる

江戸切子

-ひと待てば聖夜の玻璃に意地もなし- 桂信子

真赤の酒も
濁りの酒も
切子の杯に
満つるを
待つか

夢見月

-やはらかき身を月光の中に容れ- 桂信子

微笑むは

朧月

まどろ
微睡むは

朝桜

今こそ春

雪仏

一心に生きてさくらのころとなる- 桂信子

雪被る

一列の地藏尊

晴れやかな

無辜の魂

率いて歩む

書き初め

-万物の一塵として年迎ふ- 桂信子

ここに

呼吸す

ここに

絶叫す

撥ねを見よ

深海

-揚羽蝶ねむりの国の蒼くあり- 桂信子

日本海溝
水深一万米
底は黒々
音なく棲む
いのち尊し

水の春

-ちるさくら孤独はいまにはじまらず- 桂信子

鴨川堤を

彩るは

さくら

やまぶき

ゆきやなぎ

春近し

-浴泉のエメラルド色花曇- 桂信子

頬紅円く

花乙女

睡り足りた

笑い猫

春近し

航空便

-海渡る魂ひとつ夜の秋- 桂信子

海越えて
君に問ふ
魂の行方
その応え
知りつつ

旅装

-男の旅 岬の端に佇つために- 桂信子

地の果てで
旅装解く
壮健にして
意志つよき
君よ

紅椿

-目に見えぬ糸の張られて白椿- 桂信子

紅椿は
地の恵み
こころ富める
民の王国
五島を彩る

濁り川

- 枯菊も芥のひとつ水に浮き- 桂信子

前（さき）の溝を

掃除せよ

進むに

進めず

濁り川

早水

- 枯蔓の切尖に触れ水激す- 桂信子

早水に

ちからあり

妨げる岩々

削りつつ

抜けてゆく

浅沼

- 樹はみどり深く沈めて秋の沼- 桂信子

底なし沼に

もがく

怖れが

浅沼と

知りながら

弱竹

- 水をみちびく竹林の精春の暮- 桂信子

咲いて

枯死す

竹の花

網なす茎が

地下広く

独り琴

- 父も夫も師もあらぬ世の寒椿- 桂信子

こでまり

こでまり

白い花

独り琴弾く

雪の夜

花曇り

- 現し世と黄泉の境の花吹雪- 桂信子

非業の
さくらは
寒々と咲く
面白の
亡き女に似て

世帯主

- 腰太く腕太く春の水をのむ- 桂信子

傷めたのは

左の手首

頼れたのは

右の腕

吾 世帯主

影踏み

- 花のなか魂遊びはじめけり- 桂信子

後ろ影を
追い駆け
戯れた頃
他人から
踏まれる

出航

- 堇まで二夕足とんで夕渚- 桂信子

目的なく
旅切符
出航の汽笛
沈思を
破る

夢袋

- 藤の昼膝やはらかくひとに逢ふ- 桂信子

夢袋を

裏返して

叩いてみれば

真実が

転がり出るか

蜜柑

- 蜜柑山女の肌に血肉満ち- 桂信子

時計台

仰いで座る

青芝生

土産の蜜柑

零す君

閉館

- 衣ぬぎし闇のあなたにあやめ咲く- 桂信子

時は

京大会館を

閉じていく

きょうも一つ

憶ひ出薄れる

年賀

- 賀状うずたかしかのひとよりは来ず- 桂信子

九月に賀状は

かの国へ

二月に賀状は

あの国へ

三度祝ひぬ

懇願

- 遠くほど光る単線稲の花- 桂信子

無音（ぶおん）の半月

ふたりにあれば

どちらかが

無事の一言

希（こいねがう）う

雛祭り

- 闇のなか髪ふり乱す雛もあれ- 桂信子

柔らかな

手に持たす

雛あられ

ほほえみの

ぼんぼり点る

牛車

- 青蜜柑横目の牛が通りけり- 桂信子

寡黙な牛ゆえ

澄んだ黒目が

ものを云ふ

代りに語る

詩人あり

修行

-韻きあふものよ晩夏の雲と水- 桂信子

無心に
研ぐは
こころ
のぞく
レンズ

翻訳

-風花や亡き師の言葉片々と- 桂信子

行間に

隠れた

本意あらむ

翻訳は

読取ること

黒揚羽

-黒揚羽飛ぶ水滴に映るまで- 桂信子

角を曲がれば

美の一撃

黒揚羽よ

おまへには

使命があるのか